



episode.03

語り続ける蘭牟田池と自然の物語

話し手 鹿児島大学非常勤講師 博士（理学）
なる お ひ で と
成尾 英仁さん（昭和26年1月21日生）

聞き手 鹿児島県立川薩清修館高等学校
1年 楠元 華奈美
1年 橋口 莉子
1年 中屋 美桜

「地学に興味を持ったきっかけ」

私は子どもの頃、川でキラキラ光る石、鉱物なんかを拾ったりしていたね。それから自分の家の畑で、土器のかけらや矢じり、西南戦争の鉄砲の弾が出てきたりして、そういうのを見て、「これなんだろうな」って興味を持ったんだよね。そんな発見が地学や考古学への興味をもったきっかけかな。今は、いくつかの高校で理科を教えていたり、大学で非常勤講師をしています。

「火山が生んだ湖」

蘭牟田池は蘭牟田火山って呼ばれる火山の火口湖。蘭牟田池を取り囲む山々はなんていうか知っているかな。“外輪山”といいます。ここの外輪山は約50万年前、粘りの強い溶岩が下の方からグーッと持ち上がってできた山。山々の高さを見るとだいたい揃っているんだな。これは下から来たマグマの量がだいたい同じだったということね。そして、池の部分は、噴火口の跡の窪地。でもこの窪地も、噴火直後は一部が崩れていたと考えられているんだよ。だから今みたいに水が溜まっていなかった。ところが、約35万年前にその崩れていた所に火山活動で飯盛山ができて水をせき止め、池になったらしいです。

でもこれも一つの説で「マグマ水蒸気噴火でできた説」や「大きな噴火後、山頂部が陥没してできた小型カルデラ説」とか、いろいろな考え方があるわけ。

「泥炭層が語る過去の環境」

今も蘭牟田池の周りはシラスだらけ。これは約3万年前に始良カルデラって錦江湾の北側ね、あそこが大噴火を起こして、その時に噴き出たものがシラスで、時速100kmくらいのスピードで、池にバーンと流れこんで来たんだよ。

ボーリング調査で水深25mまで掘ったら、水深13～25mまで全部シラス。始良カルデラの噴火で蘭牟田池は、シラスが積もって水深が浅くなったということがわかるよね。水深が浅くなってしまっ

て池の周りに水生植物が生えるようになったんだね。

植物が枯れたら普通は分解されてしまうけど、蘭牟田池は標高が高いから寒いね。植物は分解され



ずに池の底にどんどん溜まって行って、泥炭という層になったんだね。この泥炭層が作られ始めたのが約1万5000年前。泥炭層の一部が剥がれて池に浮かび、これが浮島になったんだね。

泥炭は、普通はもっと寒い地域や高い山にできるから南国の鹿児島にできるというのは非常に珍しい。だから、国の天然記念物に指定されたんですね。この貴重な湿地とベッコウトンボなど生き物がいるということで、ラムサール条約にも指定されたんだ。そして、風光明媚なもんだから、県立自然公園というわけです。

「火山の恵み」

火山の近くには必ず、温泉があるんだね。ここら辺でいうと入来温泉だね。そして、火山活動でできるといえば金だね。菱刈金山とか串木野金山とか有名だよ。入来温泉の周辺にもちょっとだけ金はあるんだよ。そして、今は知られてないけど、かつて有名だったのが“入来粘土”。粘土っていうのも温泉の熱で石が柔らかくなって粘土ができるんだね。

昔は入来粘土を採っていたみたいだけど、今は採ってないみたい。実はこの入来粘土を鹿児島大学で研究していたのが、京セラの創業者 稲盛和夫さんね。

話は横道にそれたけど、火山活動によってできた蘭牟田池の水も今は、農業用水として使われていたり、まあ、“火山の恵み”ということになりますね。

「蘭牟田池を守るために」

いろいろあるけど、まずは、蘭牟田池がどうしてできたか調べる。そして、いろんな動植物が生息しているから、これらをちゃんと記録すること。記録しておけば、増えた、減ったがわかるからね。

あとはなるべくオーバーユース、使い過ぎをしないね。観光事業や農業用水なんかも、どういことが自然に影響を与えるか、考えながら使っていく必要があると思うよね。そのために蘭牟田池の自然について、基礎的な調査研究をしていくことが必要だと思いますけどね。

